令和五年度　入学試験問題　国語

和歌山市医師会看護専門学校

受験番号

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

新しくできた高層アパートにはいろいろな外国語名が出てくる。「マンション」はその一番最初に、そしてまた一番広く見かけられるものであるが、その他にも、「ハイム」、「カーサ」、「パビョン」、「ヴィラ」、「レジデンス」、「アビタシオン」、「ドルフ」などさまざまな名前が出てくる。すべて外国語からの借入であるが、もとの言語の種類から言っても、英語（mansion, villa, residence）、フランス語（pavillon, villa, résidence, habitation）、ドイツ語（Heim, Dorf）、スペイン語（casa）など、およそさまざまである。このような、場合によってはあまり馴じみのない名称が好んで選ばれる心理は誰にもよく分かる。［　a　］、伝統的にこの種のものに対する名前であった「アパート」という語はすっかり日常的なものとなり、あまり魅力のあるものを暗示しなくなったために、何かそれに代るものが必要になったわけである。そのためには、あまり耳慣れない何か日常からかけ離れたものを暗示するような語が都合がよいのである。［　b　］、伝統的な「アパート」という名称はいつもどちらかと言うとあまり見栄えのしないものにつけられ、一方例えば「マンション」という名称は常に高級なものにのみ与えられているというのであれば、それはそれなりでよいのであるが、問題は「マンション」などといった名称があまりそれほどでもないようなものに対してつけられている場合に起こる。例えば、ある人が「マンション」という名称にひかれて部屋の［　①　］をしてしまったところが、実際に見てみると「アパート」と呼んでおいても十分な程度のものであったというような場合である。

このような場合は、一般的に言うと、語の「意味」は語によって指されるもの（「指示物」という術語を使うのがふつうである）とは別の次元に属するという重要な原則に関係する。ここで言う語の「意味」とは、その語をどのような範囲のものに対して用いるかということに関しての社会的な決まりである。これはちょうど、ある道具はどういう場合に用いるとか、ある礼儀作法をどういう場合に行なうとかといったことが社会として決まっているのと同じことである。同じようにものを切る道具であっても、のこぎりとほうちょうとでは用いられる場合が明らかに違う。同じように相手に対する礼儀作法であっても、会釈ですます場合と［　②　］をする場合とはもちろん同じではない。それと同様に、「アパート」という語をどういう場合に使うか、「マンション」という語をどういう場合に使うか、ということに関しても社会習慣的な区別があるわけで、それが「アパート」なり「マンション」なりといった語の「意味」である。語はその「意味」に従って用いられるのが原則である。もちろんそういった社会的なルールがなければ、言語は伝達の手段として十分な役割を果し得ないからである。「アパート」という語が「アパート」という語の意味に従って、「マンション」という語が「マンション」という語の意味に従って、それぞれ用いられている限りは問題ない。しかし、言語の話し手は語をその意味に従わないで用いる自由も有している。例えば「マンション」という語を本来ならば「アパート」という語を使うべきところに用いるというような場合である。いわゆる「嘘」と呼ばれる現象は、すべてこの種の言葉使いに基づいて成り立っている。

一方では語はその意味に従って用いられるのが原則であること、そしてまた他方では、われわれ言葉の話し手は言葉によって指されているものが眼の前になくとも、言葉を操ることによって十分意図する伝達を果しうるということがあるがために、われわれには言葉によって意味されている通りのものが存在しているかどうか、いちいち必ずしも確めてみないという習慣が身についてしまっている。そのため、「マンション」と呼ばれていればその名にふさわしい（つまり、その語の意味にかなった）ものが存在しているはずだと思い込む。これを逆に利用すれば、たいして立派でもない住宅でもそれを「マンション」とさえ名づけておけば、聞いた人は実際以上によいものがあると想像するかも知れない。名前が日常生活に馴じみの薄い外来語で何となく立派そうに聞えるものであれば、それはそれだけよいわけである。しかし、何度も繰返されればそのようなからくりもだんだん知られて効果がなくなってくる。「マンション」という語について[A]そのようなトリックが働きにくくなったなら、今度は何か別の立派そうな語でそれを置きかえてやってみるということになる。そのようにして、このような分野には新しい名称が次々に登場してくるのである。

人間の言葉では、語の「意味」と「指示物」とが一致しないのはそれほど珍しいことでもない。すでに触れたように、これは広い意味での「嘘」の場合であるが、嘘をつくのが可能であるということは目の前に現に存在しないものごとについても伝達を行ないうるということで、これは人間の言語の一つの重要な特徴でもある。［　c　］鳥がある叫び声で仲間に危険を知らせるとか、蟻がある種のホルモンの［　③　］によって食物のありかを仲間に知らせるというような場合を仮りに「動物の言語」と呼ぶにしても、このような言語の使用は現に存在する刺戟（しげき）に対する反射的な反応に近い形で行なわれ、そのような刺戟が存在しない場面で用いられるとか、ましてその種の刺戟があたかも存在しているかのような印象を与えることを意図して用いられるというようなことはまず考えられない。犬に食物を実際に見せて尻尾を振らせることはできるが、（三日後においしい肉をたくさんあげるよ）というようなことを正しく理解させて尻尾を振らせるというのは［　④　］の業であろう。犬にとってできることと言えば、語りかけている人間の素振りを今すぐ何か食物をくれるものと誤解して尾を振るというのがせいぜいのところである。

[B]動物ばかりでなく、同じことは幼児が言語を習得して行く過程についても認められる。ごく初期の幼児の言語の理解もやはり目の前にあるもの――（ここ）（HERE）と（今）（NOW）に結びついたことがら――に限られる。すぐそばにある何かを指して「コレナニ」と尋ねるのは比較的早く始まっても、例えば隣の家で見た何かを［　⑤　］において「アレナニ」と尋ねられるようになるにはだいぶ時間がかかる。同じように、「キノウ」とか「アス」といった語の意味を子供が理解して十分使いこなせるようになるのも非常に早い時期ではないし、疑問詞の「イツ」が使われ始めるのは「ナニ」の場合よりもだいぶ遅れるのがふつうである。

目の前に存在しないものについて語ることを言語の「転位用法」（displaced speech）というような名称で呼ぶことがある。このような言葉の使い方ができるということによって、人間が蒙っている［　⑥　］は計り知れない。一方で数学のような抽象的思考を進めることによって知的創造が可能になるということも、また他方では過去からの莫大な文化的遺産を蓄積し後世に伝えることができるというのも、すべて人間はそのような言葉の使い方をする能力を身につけているからである。

しかし、このような能力は一面ではC諸刃の剣ともいうべき性質をも備えている。それは確かに人間に対して〈ここ〉と〈今〉という窮屈で狭い現実をはるかに越えた創造を可能にしてくれる。しかし、それはあくまで言葉の創り出した世界であり、現実に対してそれが虚であるか実であるかについては、言葉自身は責任を取らない。

イソップ物語に「狼ガ来タ」と言って村人を驚かせて喜ぶ少年の話がある。この話は、人間の言語の一つの重要な機能を大変よく象徴している。しかし、少年の言葉の虚構性に気づいた村人たちは、やがてこの少年を相手にしなくなる。この話にも見られる通り、D言葉の虚構性が伝達を目的とする言語の基本的な機能と矛盾するようになると、それに伴なう混乱や不利益は避けられない。

アメリカでは、言葉の意味をめぐって生じるこの種の問題――もっと一般的に言えば、言語生活における不適応の問題――を分析し、その解決の方法を考える「一般意味論」（General Semantics）という応用的学問の分野がある。この「一般意味論」を提唱する人たちは、「マンション」というような語をめぐって生じるすでに見たような問題を回避する［　⑦　］として、Find the referent!（指示物を見つけなさい）という標語を作っている。つまり、間違いが起こるのはわれわれが言語レベルの操作だけで一つの判断を下してしまうということにあるのであり、現にその言葉によって指されているものを自分の眼で確かめるという習慣を作り上げることによって間違いは回避できるというのである。「マンション」といった語によって指されているのが実際にどのようなものであるかを確認すれば、確かに後で［　⑧　］な判断を悔いるというようなことは避けられよう。しかし、残念なことに実際にはわれわれの日常生活ではいつもそのような確認をするのが可能であるとは限らない。

空想的な科学小説に、どこかの星から地球へやって来た宇宙人がわれわれ地球人とコミュニケーションを行なうことができるようになり、地球人の文化をそのすぐれた知能ですべて理解できるようになったが、ただ一つだけ、どうしても理解できないことがあった。それは「嘘」という語の意味であった、というような話がある。「嘘」という言語行為の存在が知能の問題なのか、倫理の問題なのかというようなことはさて置いても、それがわざわざこのような形の話として取りあげられるというのも、「嘘」をつけるということが人間の言葉使いの一つの重要な特徴であるからである。そして「嘘」が可能になるのは、語の「意味」と「指示物」とは別の次元に属するという意味論での基本的な原則があるからである。

われわれの身の回りでは、もともとあるものに対して用いられていた表現が外来語によって置きかえられるということがよく起こっている。このような場合の事情も、基本的にはすでに見た「マンション」と「アパート」の場合と同じである。「既製服」という表現から受けるわれわれの印象はどちらかと言うとあまりよいものではないし、たとえ「高級」というような表現を加えて「高級既製服」と言っても、そのようなイメージは完全には拭い去れない。しかし、「プレタポルテ」（pret-a-porter つまり英語に直訳すると ready to wear ということで、すぐ着用できる服という意味）と言えば、受ける印象は一変する。「夏みかん」という代りに「サマー・オレンジ」とでも呼べば、夏みかんというもののすっぱさを苦手とする人たちにも食べてみようという気を起こさせるかも知れない。外来語はわれわれにとって新しいものであるから、それが何か珍しいよいものを暗示していると思わせるのには適している。そのためだけの目的なら、用いる外来語はわれわれにとって馴じみの薄い、しかしそれでいて［　⑨　］とある種の魔術的なムードをもっているようなものであればそれだけ好都合なわけである。ファッション関係では英語よりフランス語が好んで使われるのは、そのような理由からである。

もちろん、新しい外来語の名称と伝統的な名称とが常に全く同一の対象を指しているとは限らない。例えば「既製服」と言えばまず男性の背広を、「プレタポルテ」と言えば女性のパリ風のモードを連想するというような人もいるであろうし、「サマー・オレンジ」は現にすっぱさを減らした新種の夏みかんかも知れない。しかし、このような言葉使いがなされる場合まず第一に意図されているのは、その名称が適用されている現実の対象そのものがどうということよりも、むしろその名称によって一つの「虚の世界」を作り出すということである。この「虚の世界」が現実よりもよい世界であれば、それだけ好都合なわけである。このような言葉の使われ方は、実用的な伝達ということを意図した言語のもっとも素朴な機能とはE対照的であることに注意しておきたい。実用的な伝達ということが目的であれば、われわれの関心は言葉によって指されている現実（つまり「指示物」）にある。これに対し、今ここで問題になっている「マンション」とか「プレタポルテ」の場合のような言葉使いでは、言葉によって現に指されているものの比重が減り、重要なのは語の意味によって作り出される「虚の世界」ということになるのである。

このような言葉使いの効果が持続するのは、もちろん聞き手の方が「虚の世界」を現実と誤って捉えてくれるという限りにおいてである。何度も繰返されるうちに「虚の世界」は虚の世界であることが見破られる。そうすると、また新しい「虚の世界」を作り出しうるような新しい語の登場が必要になってくるのである。

「マンション」と「アパート」では外来語と外来語、「プレタポルテ」と「（高級）既製服」とでは外来語と日本語本来の表現がそれぞれ対比されたわけであるが、同じことはもちろん日本語本来の言い方どうしの間でも起こりうる。「退却」の代りに「転進」、「敗戦」

受験番号

の代りに「終戦」、「占領軍」の代りに「進駐軍」と言うのは第二次世界大戦の後半期から戦後にかけての頃の目立った例である。このような表現は敗戦という現実を直視する代りに、何かそうでない世界に身を置いているような［　⑩　］を与えるという効果を持つ。ごく最近では「共かせぎ」の代りに「共働き」、「出かせぎ」の代りに「季節労働者」といった例が多く見られるし、「未開発国」(underdeveloping country) の代りに「開発途上国」(developing country) と言うようになったのは、英語での変化に倣ったものであろう。場合によっては、「停年」から「定年」というように、もとの表現とその代りになった表現が同音語というようなこともある。

（池上嘉彦『意味の世界　現代言語学から視る』による）

問一　空欄a～cにあてはまる適切な語を次の（ア）～（オ）の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。なお、同じ語を重複して使わないこと。

（ア）ゆえに　（イ）例えば　（ウ）また　（エ）しかし　（オ）つまり

問二　傍線部A「そのようなトリック」とはどういうことか。本文の内容に基づいて説明しなさい。

問三　傍線部B「動物ばかりでなく、同じことは幼児が言語を習得して行く過程についても認められる」とあるが、「動物」と「幼児」に関する具体例を取り上げることによって、筆者はどんなことを伝えようとしているのか。説明しなさい。

問四　傍線部C「諸刃の剣」について、次の各問いに答えなさい。

（1）この語の辞書的な意味を書きなさい。

（2）この語が表す具体的な内容として、本文ではどのような説明がされているか。

問五　傍線部D「言葉の虚構性が伝達を目的とする言語の基本的な機能と矛盾する」とはどういうことか。わかりやすく説明しなさい。

問六　傍線部E「対照的である」とあるが、何と何がどういう点で「対照的であるのか」説明しなさい。

問七　空欄①～⑩にあてはまる語を後の語群から一つずつ選び、それぞれ**漢字に改めて**書きなさい。なお、同じ語を重複して使わないこと。

【語群】オンケイ　シナン　セイキュウ　ケイヤク　ブンピツ　ゲンソウ　ホウサク　ネントウ　サイケイレイ　バクゼン